

## 日本及びアジアの河川再生の担い手をつなぐ協働基盤構築

日本河川・流域再生ネットワーク

### 活動の概要

日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN) は、日本・中国・韓国などで構成される「アジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN)」の日本窓口として、国内及びアジアの河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動しています。国内外の河川再生の担い手が繋がり、河川再生に向けた新たな行動を起こす人材を増やし育成することを目指し、アジアに向けては、毎年開催する国際フォーラムや海外視察団の受入支援を通じて日本が培った経験を普及し、国内では、河川再生に関わる情報共有ツール（ホームページ、刊行物等）の整備や産官学民を交えた講演会や研修行事等を開催しています。

### 団体の設立経緯

私たちの歩みは2003年3月に京都・滋賀・大阪で開催された第3回世界水フォーラムまで遡ります。アジアで初開催となった本フォーラムにおける分科会「流域

#### <6つの提言>

- 河川の再生は、治水や利水と同じく、人類の存続に不可欠である。
- 河川の管理は、変動と攪乱によって形成される「流域」を基本単位とする。
- アジア・モンスーン地域に相応しい河川再生の方法論を確立することが必要である。その際には、高い人口密度、頻発する水災害、豊かな水田などアジアの特徴を考慮する。
- アジアの歴史・文化的土壌として人間活動と自然との調和があり、長年の人間活動により形成された風土は、文化と同様に自然にとっても重要である。
- 河川の再生は、多岐の学問分野と組織の力で成し遂げられる。それ故、河川再生に関わる優れた事例や専門情報を、アジアの河川に関わる実務者・環境科学者・生態学者・水資源管理者そして市民で共有する仕組みが不可欠である。
- 類似した自然・社会環境を保有するアジア・モンスーン地域として、河川再生の技術指針を構築することが緊急の課題である。



ARRN設立記念フォーラム（2006年11月）

における自然との共生と順応的管理による川の自然再生」では、水辺環境に関わるアジアでの情報ネットワークの必要性が提起されました。この提案を受けて設立された検討会ではネットワークのあり方について議論が重ねられ、2006年3月にメキシコで開催された第4回世界水フォーラムでは、日中韓共催で「アジア・モンスーン地域の河川再生」をテーマとする分科会が開催され、現在の活動の支柱にもなっている6つの提言（左記）が示されました。この提言を具現化することを目的に、2006年11月にARRN及び各国の窓口機関としてJRRN（日本）、CRRN（中国）、KRRN（韓国）が同時に設立されました。

### 活動の目的

良好な河川の保全・再生が創り出す健全な水循環系及び歴史・文化と共存する地域社会の実現に向け、河川再生について共に考え次の行動へと後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じて、各地域に相応しい河川・流域再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動しています。3つの目標は次の通りです。

- ① 国内外の河川再生に関する優れた事例、知見、技術、人材、仕組み等の信頼度の高い情報を蓄積し、参加者で共有する仕組みを整備する。
- ② 信用と信頼を基本とした国内外関係組織とのパート

ナーシップを構築し、自立した組織となる。

- ③ 河川再生を担う様々な人々（市民、実務者、行政関係者、学識者、企業等）が幅広く参加し、それぞれが適切な役割分担のもと、河川再生に関わる新たな技術体系、事業、提言、意識共有を創り出す場を提供する。

## 主な活動内容

河川再生に関わる国内外の情報共有基盤の整備、また河川再生の担い手が集い、互いの経験を共有し新たな知見と共感を習得する機会を創出しています。

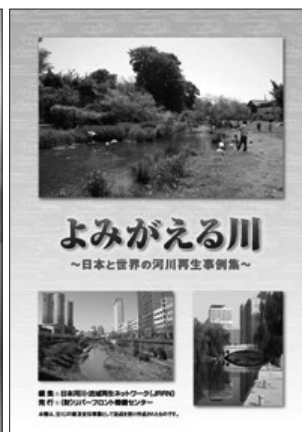
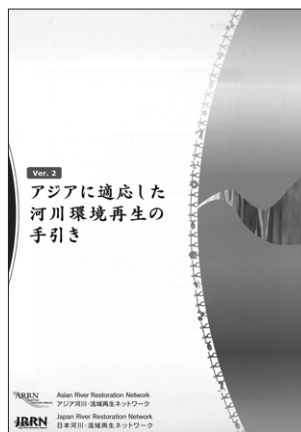
- (1) グローバル&ローカルな取組みを日本全国に普及  
～河川再生の知見の共有基盤整備～

河川再生の担い手に資する情報を提供し、その活動を後押しすることを目的に、河川再生に関連する国内外のニュース、イベント、事例、参考文献等を、ホームページ、facebook、ニュースメール（毎週配信）、ニュースレター（毎月発行）等の公開媒体を通じて広く社会に普及しています。

また、国内外の河川再生に関わる優れた事例や教訓等を学ぶ情報ツールとして、事例集や手引き等を制作し全国に無償で提供しています。

これまでの主な刊行物

発行年月	名称
2009.4	アジアに適應した河川環境再生の手引きver.1
2010.6	桜のある水辺風景2010写真集
2011.3	よみがえる川 ～日本と世界の河川再生事例集～
2012.6	桜のある水辺風景2011写真集
2012.2	アジアに適應した河川環境再生の手引き ver.2
2012.6	桜のある水辺風景2012写真集
2012.6	PRAGMO日本語版 河川及び氾濫原再生の順応的管理に向けたモニタリングの手引き
2013.2	川を活かす・守る ～河川再生事例集～
2013.6	桜のある水辺風景2013写真集
2014.3	河川モニタリング活動事例集 ～できることから始めようー市民による河川環境の評価～
2014.7	桜のある水辺風景2014写真集
2015.3	できることから始めよう 水辺の小さな自然再生事例集
2015.6	桜のある水辺風景2015写真集
2016.6	桜のある水辺風景2016写真集
2017.6	桜のある水辺風景2017写真集



- (2) 川づくりの人づくり ～河川再生の担い手の育成～

河川再生をテーマとするシンポジウムや技術交流行事を企画・開催しています。2008年から2011年には「JRRN河川環境ミニ講座」として計9回に渡り国内外の河川再生の事例発表会を開催しました。また、2015年以降は、「小さな自然再生」研究会の運営幹事として、水辺でできる「小さな自然再生」の普及促進に向けた意見交換会や、座学及び現場実習で構成されるフィールドワークショップを中心に開催し、河川再生の担い手の育成の機会を有識者と協働で創出しています。

なお、これらすべての行事成果は、講演録や研修会報告書として冊子に取り纏め、上記情報共有基盤を通じて全国に普及しています。



講演録等の発行実績

発行年月	名称
2010.6	第4回JRRN河川環境ミニ講座講演録
2010.7	第5回JRRN河川環境ミニ講座講演録
2010.11	第6回JRRN河川環境ミニ講座講演録
2011.5	第7回JRRN河川環境ミニ講座講演録
2011.10	第8回JRRN河川環境ミニ講座講演録
2011.12	第8回水辺・流域再生国際フォーラム講演録
2012.1	第9回JRRN河川環境ミニ講座講演録
2013.2	講演会「市民による河川環境の見かた・調べかた —英国PRAGMOに学ぶ」講演録
2014.3	JRRN初春の都心の舟めぐり 開催報告
2015.10	第1回小さな自然再生現地研修会@豊田 開催報告
2015.12	第2回小さな自然再生現地研修会@滋賀 開催報告
2016.2	小さな自然再生が中小河川を救う!Ⅳ 講演録
2016.3	「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」 国際シンポジウム講演録
2017.1	第3回小さな自然再生現地研修会@福岡 開催報告
2017.2	第4回小さな自然再生現地研修会@兵庫 開催報告
2017.3	小さな自然再生が中小河川を救う!Ⅴ 講演録
2017.3	第5回小さな自然再生現地研修会@千葉 開催報告
2018.2	第6回小さな自然再生現地研修会@福井 開催報告
2018.3	第7回小さな自然再生現地研修会@岡山 開催報告
2018.4	第8回小さな自然再生現地研修会@秋田 開催報告

(3) 日本の川づくりの経験をアジアへ普及

～河川再生の国際的な技術交流の推進～

毎年開催するARRN主催「水辺・流域再生にかかわる国際フォーラム」や河川再生に関わる国際シンポジウムの共催を通じ、日本の河川再生の経験・技術をアジアに向けて普及しています。

また、河川再生に関わる海外政府機関や研究機関、市民団体等の来日視察を支援しています。海外視察団の技術的関心を事前に確認し、その要請に適った日本国内の河川管理者へと繋ぎ、協力を得ながら国内外の河川再生の技術、施策、具体事例等の橋渡しを担っています。

水辺・流域再生国際フォーラム開催（計14回）

回	開催年月	開催地	備考
1	2005.1	東京	ARRN設立前準備会
2	2005.10	東京	ARRN設立前準備会
3	2006.11	東京	ARRN設立式典併催
4	2007.11	東京	単独開催
5	2008.11	北京	第4回APHW分科会
6	2009.9	ソウル	第5回KICTワークショップ 分科会
7	2010.9	ソウル	ISE2010 分科会
8	2011.11	東京	単独開催
9	2012.11	北京	単独開催
10	2013.9	成都	第35回IAHR大会 分科会
11	2014.10	ウィーン	第5回欧州河川再生会議 分科会
12	2015.4	慶州	第7回世界水フォーラム 分科会
13	2016.8	仁川	HIC2016 分科会
14	2017.8	マレーシア	第37回IAHR世界会議 分科会



国際シンポジウムの共催（計7回）

回	開催年月	開催地	名称
1	2008.9	東京	シンポジウム「河川環境講演会～海外における環境水工学の最新の研究紹介」
2	2010.9	ソウル	アジアの河川再生技術共有に向けたラウンドテーブル会議
3	2012.12	東京	シンポジウム「市民による河川環境の見かた・調べかた～英国『PRAGMO』に学ぶ～」
4	2015.9	豪州	第18回国際河川シンポジウム「アジアの河川再生」
5	2015.11	京都	国際シンポジウム「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」
6	2017.9	慶州	国際セッション「アジアの水問題—気候変動と河川再生」
7	2017.12	東京	シンポジウム「不確実性を増す気候および環境ストレス下での河川流域管理」



海外視察団の受入支援  
（計29回：韓国 11、中国 8、台湾 6、その他アジア 4）

## 活動の効果と社会への波及効果

河川再生に関わる国内外の知見の共有基盤整備や担い手を支援する取組みは、健全な水環境の保全・再生や地域づくりに向けて河川を利活用し、地域に根ざした自発的行動を起こす人材を育てること、またそうした取組みへのハードルを下げることで、地域の水問題に取り組む担い手を増やしていくことにも繋がります。加えて、これまで中心的に水の管理を担ってきた行政のみならず、その応援団として地域住民が専門家等と協働しながら関わる社会環境が醸成されることは、合理的かつ持続可能な地域の水環境の管理にも寄与すると考えています。

活動成果の波及効果としては、日中韓の実務者が協働で執筆した「アジアに適応した河川環境再生の手引き」、市民団体の生の声に基づく「河川モニタリング活動事例集」、活動の担い手自らが企画・執筆した「水辺の小さな自然再生事例集」等は、他言語へ翻訳されたり、川づくりに取り組む市民団体にも利活用されています。また、現在4年目となる「水辺の小さな自然再生」をテーマとしたシリーズ現地研修会（これまで8回開催）は、各現場で自治体や市民団体による新たな活動へと繋がり、全国の河川管理者や市民団体から、新たな現地研修会開催の要請を多数頂くようになりました。

## 活動に際しての工夫

団体設立当初は、活動内容、協働すべきパートナー、果たすべき役割など、すべてを模索しながらのスタートであり、扱う情報も二次情報が主体の中、国内外の河川再生の担い手のニーズを見極めながらの一方通行の活動でした。しかし、現在は会員（個人会員・約770人、団体会員・約60団体）も増加し、河川再生を担う様々なセクターとの協働により一次情報を主体としたツールを共創できるようになりつつあります。

河川再生の協働基盤構築に向けては、活動の主役はあくまで河川再生を担う国内外の活動主体であり、その主体を横断的に繋ぎ、後方支援し、それぞれの知見を共有しながら諸活動の更なる推進と最適化を図ると

いうネットワーク本来の『触媒的機能』を常に意識して諸活動に取り組んでいます。

ARRNのモデル組織でもある欧州河川再生センター（ECRR）より助言を頂きながら、2009年には、情報共有と人材交流の基盤整備（I）、知的財産の蓄積と普及（II）、組織基盤の強化（III）、啓発・研修・教育の推進（IV）、新秩序創出（V）というネットワークの段階的発展プロセスを設計し、現在は各段階に相応しい活動を企画しながら、協働パートナーの支援を得て活動を発展させています。

中でも中心的に取り組む講演会や研修会等の企画に際しては、行事の開催を目的とはせず、行事の成果が新たな川づくりに活用され、活動主体の次の行動へと繋がることを特に意識し、すべての活動成果は、①報告書や冊子等にとりまとめる、②ウェブサイトで公開する、③学会やシンポジウムで公表し意見交換を行う、意見等を踏まえ④次の活動へフォローアップするという順応的なサイクルで進めています。

## 今後の展望

国内活動と国際貢献を有機的に連動させながら、地域が主体となる持続可能な河川の管理に資する諸活動を後押し、その担い手を育成するための知見や技術の汎用化（事例集、手引き等）とその普及に努めてまいります。

また、河川再生に関わるアジアのネットワーク活動のハブ機能を当団体が担い、日本の河川再生の成功や失敗経験を謙虚に伝承しながら、川づくりを通じてアジア諸国との更なる友好関係の構築に貢献します。

そして、これまでの国内外活動を持続的に発展させていくためにも、ネットワークが有する国内外専門家とのオープンイノベーションにより専門性を高めながら、中立性の高い自立した組織となることを目指していきたいと考えています。

日本河川・流域再生ネットワーク